

—表紙絵—ベン・シャーン 「一篇の詩の最初の言葉」—

提 言 県文化功労賞受賞者 今井豊蔵 6

提 言 昭和62年度県教育委員会重点施策

提 言 昭和62年度学校教育指導の重点

昭和61年度教職員研究論文特選入賞者論文紹介 38

告知板 「教育福島」新年度号案内・ほか 46

教育ひとくちメモ 49

教育センターから 昭和62年度教育センター研修計画 50

養護教育センター通信 昭和62年度養護教育センター研修計画 52

図書館コーナー 昭和62年度県立図書館事業の概要 54

美術館だより 昭和62年度県立美術館主要行事 55

博物館だより 昭和62年度県立博物館主要行事 56

名画散歩

表紙絵 「一篇の詩の最初の言葉」 ベン・シャーン作
版画集（リルケ「マルテの手記」より）
紙・リトグラフ 五七・三×四五・三（cm）
一九六八年制作 福島県立美術館蔵

一年間に渡って、アメリカの画家ベン・シャーン作品と生涯をご紹介してきました。今月号ではその最後として、ベン・シャーンと現代の芸術について考えてみたいと思います。

「写真から抽象へ」これが二十世紀前半の美術の大きな流れでした。写真の登場などによって、本物らしく描くだけでは絵画の存在意義が薄れてしまったのです。また、美術の愛好者も王族、貴族、僧侶など一部の人間ではなく、多くの人が美術に対して多様な要求を持つようになったので、画家たちは、誰のために何をどう描くべきか悩んでいます。現代の美術が写実的な絵画、抽象絵画、様々な素材を使った作品、さらには描かれた作品よりも描くという行為を重視するパフォーマンスに至るまで多様な傾向をもっているのは、このような理由によるのです。しかし、社会の動きと同様に美術の流れも早過ぎるために、人々にとっては理解するのが難しくなっているのが現実です。

このような中であって、ベン・シャーンはどの様な意義を持つのでしょうか。貧しい移民であった彼は、自分と同じように貧しい名もない民衆のために描きました。彼の作品の中心テーマは、目まぐるしく変貌し、高度に技術が発達して便利にはなっただけでも、しばしば人間を疎外する現代社会と、そこに生きる人々の姿です。彼の絵は一見単純で、漫画のように見えるかも知れませんが、しかしよく見ると構図も形も色も質感も慎重に考えられています。その上で、できるだけ単純に画面を構成しようとしているのです。彼は絵の中にメッセージを込めました。絵を通じて人々と連帯することを求めたのです。

現代の美術はますます複雑になり、難解になっています。これが美術なのだろうかと考えてしまうものも少なくありません。その中でベン・シャーン作品はむしろ地味ですが、しかし今も静かに私たちに語りかけているのです。